

東京五輪物語

1964 - 2019 - 2020

開幕前年⑨

国立競技場に殺虫剤

蚊やハエ退治 防げ感染症



国立競技場を消毒する保健所の職員ら。当時の記事によると、選手の控室や近くの工事現場などをしらみつぶしに回り、DDTとBHCの混合油剤を散布したという。今ではいずれの物質も国内での製造や使用が禁じられている
=1963年、東京都

1964年大会の時の感謝状を手にするアベックス産業の元木貢社長=東京都港区

国立競技場に立ち上る入道雲のような煙。1964年東京五輪の1年前の63年10月、競技場では消毒が行われていた。

五輪のリハーサルといわれた「東京国際スポーツ大会」を控え、殺虫剤がまかれた。当時の新聞は、「カモハエも一匹も出ない」と話す係員たちの様子を「自信満々」と紹介している。当時、蚊やハエは脅威だった。

蚊が媒介する日本脳炎は60年代、患者の報告数が国内で2千人を超える年もあった。東京23区の下水道普及率は63年3月末時点で23%足らず。トイレの多くはくみ取り式でハエが発生し、川ではボウフラが湧いた。蚊とハエをなくす運動が推奨され、便所に薬剤を散布したり、殺虫剤のオイルを塗った折り鶴を配ったりする地域もあった。

都内の害虫駆除会社「アベックス産業」には大会組織委員会からの感謝状がかかる。現社長の元木貢さん(72)の父、三喜男さん(故人)が副理事長だった「東京都殺虫消毒同業協会」(当時)が、五輪会場などの害虫駆除を550万円で請け負ったという。元木さんは「環境も使われる薬も対策も、今では大きく変わった。けれどもグローバル化や温暖化が進むなか、感染症の脅威は大きい」と話す。今年9月2日、休園日の東京・新宿御苑で殺虫剤が噴霧さ

れた。来夏の東京大会を前に、蚊から病原ウイルスが検出されたと想定し、感染した蚊を駆除する訓練だった。

デング熱が国内で発生し、161人が感染したのは5年前。代々木公園(東京都渋谷区)の蚊がその多くを媒介したとされる。ウエストナイル熱といった蚊が媒介する別の感染症も米国などで広まっている。

「五輪で海外から多くの方が来られれば、ウイルスが入るリスクも高まる。万が一、感染者が出て被害を最小限に食い止めないといけない」。訓練の中心となった国立感染症研究所昆虫医学部長の葛西真治さん(49)は話す。「日本で不安な思いをしてほしくない。きちんとした環境で迎えたいという気持ちには(64年大会と)通じるものがありますね」(萩原千明)

思い出の写真をお寄せ下さい

東京五輪の思い出の写真をお寄せ下さい。当時の写真をコピーして裏に説明を書き、〒104・8011(所在地不要)朝日新聞編集局スポーツ部「五輪物語」係へ。写真はお返しできませんので、必ずコピーをお送り下さい。電子データはメール(gorinmonogatari@asahi.com)でも受け付けています。